

さて玄関に出て涼しい朝の空気にふれると眠け一掃、まだ明けきらないホテル附近の道路を見ると、前の人道のまん真ん中に五、六人の男がペタッと座り、小さな焚き火を囲んで朝飯らしいものをやっている。右の方を見ると塵芥を一ぱいに盛った大籠を頭にのせて行く男、左の方からは勤め人らしいのも二、三人くる。その向こうには商館入口の階段を一宿のベッドとして、まだ毛布のようなもの一枚を被って熟睡らしい何人かもある。

この市内でもやや目抜き地域にして、この早朝の光景なんだから、他は推して知るべしと思つていこううちに、やっと自動車が数台揃つたので、いよいよ出発、といっても私はまだどこへ行くとも書いていません。実は今日はこれから待望のブツガヤの大塔を拝するため、空路パトナへ向かうという次第。子供の時分、遠足に行く時だつて、こんな胸をふくらませて出かけたことはないような気分。この老軀ろうこが生きて釈尊の金剛宝座の前に立つことができるのだ——と思つと、血管のすみずみにまで喜びが伝わるような感激で、一昨日の晩に通つてきたマンゴアの並木路を四十分走つてカルカッタのダムダム空港に急ぐのであった。

日本の初夏の朝のような薄もやのこめた飛行場へ入つて行く。本当に爽かな感じで、定刻三十分前に車から降り立つたのだが、その感じのよい薄もやがいけなかつた。霧のために飛行機は正一時間も遅れて八時十分にやつと出発、東京・岡山間くらい距離のところを一時間三十分で飛びパトナの空港に着いた。途中空から見たこの北インドの大平原地帯は、実にみごとに整理された耕地つづき、一つの起伏もなくまた耕さないところのない、ガンジス河とその支流を擁擁して広がった穀倉地域、中国の平原を知っている眼で見てもこの広さと平坦さには驚いてしまった。

ところでこのパトナの空港は、これはまた何とも可憐なもので、機を降りてちよつと歩いて事務所へ行く。ほとんど人の気配もないほどの静けさ、時間のズレから車が来ないよう、この空港の軒先みたいなところに並べた椅子に腰をおろして日光浴をする。眼さきの花壇に松葉ぼたんが咲き、またミソハギが咲きゴルドメリケエが静かに咲いて、初秋のような陽が少し暑い。そして滑走路の隅に小屋がけのような農家が二軒、稲が少し干してある。まるで家庭飛行場といったところである。

正十時、五台の車に分乗して、三十キロメートル(里のようにも記憶するが)とか五十キロメートルとかあるブツガヤへ向かう。

パトナの市街は静かで広い。三十キロメートル走つてもまだパトナじゃないちよつと真ん中辺なんだと聞いた。日本なみに「市町村合併かナ」と思ったが、人力車、馬車などが主でシーンとした街角に厳然と交通巡査がいるところは、わが故国とは少し趣が違うようだ。

この街でちよつと休止。明晩はここに戻つて一泊するというホテルのわきに、大型の犬くらいのラバがおり、またロバもいる。親兄弟みんな乗せたようなガタ馬車を、この小さい馬がたて髪をふりふり街路を牽ひいて行く。なんだか哀れでもあり、またのどかでもある。

この馬車で気がつき街の風物に眼を向けると、ミシンを往來のはしに持ち出して何か縫縫っている。気をつけて見ると軒下でもやつている。とにかく人通りの路傍ろぼうで陽に当たりながらやつている。見せびらかしと広告を兼ねたものだという話。また店先き街路樹の下などに網あみづくりの寝台を持ち出して、半裸の男が日ざかりを寝ている。まるで飴あめがとけているような気分である。

むかしパートナートラといったこの町は、熱烈な仏教信者であったアシヨカ大王がその首都を置いた土地である。さらにそのもつとむかしには釈尊もいく度かこの地の土を踏んで通られたところでもある。いまこの珍風景をみてみると、とても右肩片袒の世尊のお姿や、仏典を求めてきた唐の玄奘三蔵の姿などは思い浮うばない。(つづく)